Japan Christian Penclub

文は信なり

2021年43号 降誕号

特集「コロナ禍とクリスマス」

日本クリスチャン・ペンクラブ　発行責任者 三浦喜代子（代表）

事務局 131-0043　墨田区立花 4-6-13　090-6504-7669　郵便振替 00170-0-61838

目次　１頁　三浦喜代子　２頁　篠田一志　３頁　槇尚子　４頁　安東奈穂美　５頁　松下勝章
６頁　駒田隆　奈良ノリ子　７頁　長谷川和子　８頁　西山純子　本田真貴　９頁　佐藤晶子
10 頁　山本悦子　11 頁　槇尚子　12、13 頁　三浦喜代子　14 頁　編集後記　JCP 紹介

ネットによる新しい文書伝道

三浦喜代子

二年に及ぶ世界規模のコロナ禍は、だれかれの区別なく私たちの日常に大きな変化をもたらした。その一つは、インターネットを使った活動が急速に進んだことだ。感染対策の第一は、人と人との接触を極力減らすことだったからだ。企業には、国のお声がかりで大々的にテレワークが要請された。今やその方法が定着しつつあるようだ。

私たちキリスト者にも似たようなことが起こった。外出を規制する宣言の中で自粛が求められ、教会は活動の扉を閉めた。

「礼拝に行けないなんて・・・」と、大いに嘆いたがルールは遵守せねばならない。

そこで、オンラインでの礼拝が取り入れられた。どこの教会でもそうしたと聞く。

日曜日の朝、あらかじめ指定された通りに機器をセットすれば、居ながらにして、いつもの時間にいつもの教会堂のいつもの講壇から、牧師先生の姿が見え、説教が聞こえてくるのだ、なんとすばらしことかと、大いに喜んだ。教友たちとの交わりができないもどかしさはあるものの、代用品としては十分である。

だが、コロナは対面で行う様々な活動を妨害した。私たち日本クリスチャン・ペンクラブ（略称ＪＣＰ）も集会を休止せざるを得なった。

幸いにして「書くこと」は集まらなくてもできる。むしろ、一人でなければできない。かと言って、孤独に書き続ければよいというものではない。書いたものを世に伝えてこそ、会の存在意義がある。ＪＣＰの使命は文書による伝道なのだから。

コロナ闇の中で、活動の柱の一つ、機関誌『文は信なり』を発行し続けた。対面の集いが出来なくても、会員は熱心に記事を送ってこられた。これこそＪＣＰの強みではないかと、一条の光を見た思いがした。また会員とはネットワークを用いて頻繁に意思疎通を図ってきている。

もう一つ、精力的に取り組んだことがある。『ホームページ』である。今やどこの組織体も設置しており、宣伝や活動の内容を発信している。もちろん我がＪＣＰも既存のものがありＰＲには大きな一役を担ってきた。

今回、それを大幅に拡充した。各所に動画も使い、内容も一変した。いわば町の商店街がショッピングモールに変貌したようなものだ。

そこに管理人としてＳ兄が常駐し、くまなく気配り目配りをして、日々新鮮な風を送りこんでいる。

少しホームページを入り口から紹介してみます。

いきなり目に飛び込んでくるのは、季節の風景を写した大型画面である。目も鮮やかな自然の風景が次々に動いていく。目だけでなく、身も心も吸い込まれていく。

その下に店舗名ともいえる内容の看板が横に並んでいる。「作品紹介」では過去にＪＣＰが発行してきた膨大な「あかし新書」を丸ごと掲載している。「あかし文章の学び」では、文章作法の講義録が載り、一人で学びができる。

トピックはブログ「日々の泉」である。会員たちによる、今現在のホットなエッセーが寄稿されている。「先人のあかし」は、日めくりカレンダーのようだ。毎日必ず信仰の糧が得られる。そこには「日々の草花」の美しい写真も待っている。

ＪＣＰの『ホームページ』をひとたび開けば、創立から現在までの資料が網羅され、一望できる。ちょうど専用の図書館のようだ。ぜひ多くの人々に訪れていただきたいものだ。

やがてコロナ禍も終息するだろう。しかしインターネット活動はますます進歩発達するだろう。

近年、ＩＴ時代の到来で、「書くこと」や本をリアルに「読むこと」が後退しているが、『ホームページ』はそれに替わる逸品としてますます重要視され、需要を喚起していくと信じる。これは新しい文書伝道の有力な武器だ。「あかし文章」発信の強い味方ではないだろうか。

『福音のためにあらゆることをしています』と東奔西走したパウロなら、このＩＴを用いて何をするだろうか。

古希を迎える

篠田一志

今年、神さまに守られ無事に古希を迎えることができました。

でも、そのとき、口から出た言葉は「無事に古希を迎えることができた感謝」ではなく、「老眼がさらに進んだ」「筋力が衰えた」などとネガティブな言葉ばかりでした。

じつは、古希を迎える少し前のことです。都内に用事があり、いつも妻に車で駅まで送ってもらうのですが、久しぶりに歩くことにしました。と、五分もすると足首が痛くなりとても歩くどころではなくなってしまったのです。サラリーマン時代は駅まで歩くなど何の造作もないことでしたが、まさかここまでとはと、驚いたことを覚えています。

きっと、ネガティブな言葉はその驚きに押し出されていたのかもしれません。

そんなわたしにシンクロするように、最近テレビの中には老化防止や老化現象をカバーする商品のコマーシャルが蔓延しているように思えるのです。

とくに、頭から足の先までの老いをケアし、対応する健康食品、医療薬品が目につきます。必ずその愛用者の体験談がどのチャンネルからも聞こえてきます。「いくつに見えますか？」そして、実年齢よりも若くに見える喜びと賛美の声で溢れていました。

まるで、「老いって罪ですよ」と言っているようで落ち着きませんでした。

そんなわたしのところに、聖書からパウロ先生の「わたしたちは勇気を失いません。たとい わたしたちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」との声が届きました。

まるで、「老眼が進み、体力が衰えた分、神の国の住民に相応（ふさわ）しい者にされているよ」と励ましをうけているかのように聞こえたのです。

また、ある先生の説教を思い出しました。

クリスチャンの一生を授業に例えて「クリスチャンは、授業の終わりのベルが鳴らないのに、教室から抜け出して、運動場に行って遊び回るようなことはしないのだ。終わりのベルが鳴るまでは、教室の中でがんばって勉強する。少々、先生が厳しくてしごかれてもだ。しかし、終わりのベルが鳴ったら、わたしたちはいそいそと運動場に出て行き、体操でもしてのびのびと体をほぐすのだ。終わりのベルが鳴ったのにまだ教室に居残るようなことはしない」。

当時聞いたときはよく分からなかったですが、今なら少し分かるような気がしたのです。

老いはたしかには辛いかもしれませんが、その先にある運動場で遊び回るプログラム、つまり天の御国へ行く終わりのベルが近づいていると思ったからです。

すると、わたしの中からネガティブな気持ちが少しずつ溶けて流れ出ていくのが分かりました。

そのとき、イエス様が「わたしが与える平安は世が与えるものとは違う」と言われたことを思い出しました。

思わず、大きくうなずいてテレビのスイッチを切ったのであります。

あらためて、このイエス様をわたしたちのもとへ送ってくださった神さまに感謝します。

アーメン

何もないクリスマスが

槇　尚子

何年もの間、クリスマスは忙しいものと決まっていた。

教会では九月になるとページェントの練習の話が始まり、十月はプレゼントの相談、十一月ともなるとアドベントが月末から入る。準備は多方面にわたり、いつかは心静かに何も仕事がないクリスマスを迎えたいと思ったものだ。

ペンクラブのクリスマス会はいつも十一月最終土曜日と決まっていた。十二月はそれぞれ自分の教会のクリスマス準備に励むようにとの満江理事長の言葉を思い出す。

昨年はコロナのために何もなかった。子供クリスマスはなし、部会の祝会もなし、老人ホームのキャロリングもなかった。職場では退職後もクリスマス礼拝だけは招待されていたがもちろんそれもなし、教会のにぎやかな祝会もなかった。あれほど何もすることのないクリスマスにあこがれていたのに、何か忘れ物をしたかのようだった。

教会では毎週小人数で礼拝と祈祷会がささげられていた。会員には週報と説教レジメが送られ、出席するのは近隣の人が数人だった。

もうすぐアドベントだというある日、一人の青年が礼拝に来た。受付にいた私は思わず彼の顔を見た。彼は二年前に受洗、コロナが始まると全く教会に来なくなった青年だ。彼は何事もなかったかのように受付を済ませ、礼拝に参加した。教会からの郵便物は届いているといった。

「今、老人施設にいるんです。コロナで来られなくって。少しずつ下火になったので来られるようになりました」

彼の屈託のない話しぶりに周りの人はほっとした。

彼は前牧師の最後の受洗者だった。その後の牧師交代で来なくなったのではと心配していたのは人の思いであった。毎週教会から郵便物を送るとき、どうか彼の手元に届きますようにと祈っていた。時には付箋紙に一言書いたりしたが、絶望的な思いになっていたことも事実である。

高齢者が多い会堂に、新しい空気が流れてきた。礼拝後、彼の周りに和やかな笑い声があふれた。今介護現場で元気に働いているという。

今までクリスマスをイベントのようにとらえていた。参加者を増やそう、何か華々しい記憶に残るようなことをしたい、そんな風にすることがクリスマスだと思い込んでいた。何もないクリスマスと思い込んでいたのは私の間違い。

老いも若きも、男も女も、元気な人もそうでない人も、共に神様の前に跪きたい。

神様は私たちの教会を見ていてくださる。そう知らされたクリスマスだ。

ろうそくを見つめて　安東奈穂美

この秋、一年ぶりに弟に会った。子ども時代の話をしていると、幼稚園のクリスマスで、ろうそくを持ったことを覚えていると言う。かまぼこの板に釘を打ち、そこにろうそくを立てたものだ。五十年を経た今も、その光は強く心に残っていたのだ。

ろうそくの光は静かに揺らめく。発する熱がじんわり伝わってくる。　その光は、すっと心の中に入ってくるような気がする。心の隅々まで細い光の筋が伸びていく。

ろうそくの炎を見つめると厳粛な気持ちになるのはなぜだろう。人間が生きていく上でなくてはならず、命に直結しているからだろうか。

人には、生まれながらに天地創造の神を感じるセンサーのようなものが備えられているのかもしれない。

『すべての人を照らすまことの光』と聖書にある。（ヨハネの福音書一章九節）

小さなろうそくの小さな光は、まことの光に続く道なのかもしれない。

今年もキャンドルサービスがある。ろうそくの光は私に何を語りかけてくれるだろうか。

私は、その語りかけにどう応えるだろうか。

ネクタイのない秋

松下勝章

この秋は、なんとなく、変だ。コロナのせいなのか、地球温暖化のせいなのかしらないが、例年であれば、我々勤め人にとって、十月の始めは、長かった夏に別れを告げ、さあ、（これから寒くなるぞ）とばかり、衣替えを行い、男性であれば、スーツにネクタイを一斉に締める時である。

ところが、である。今年は、皆々、口にマスクをつけてはいるが、ネクタイは締めていない。正直、小生もネクタイは、あまり好きではないし、ないで結構であれば、それでもいいのだ。けれど、“世間体”というものがある。暗黙の了解で、衣替えの日に、ネクタイを締めずに会社に出社したともなると、その人となりが疑われる、そんな気兼ねがあった。

なので、こっそりと鞄の中に、ネクタイを持って出社した。電車に乗ると、パラパラとネクタイをしている人がいるが、ほとんどが、クールビズのままなのである。勤務先でも、十一月になった今も、ネクタイ組は、少数者である。それどころか、なんとなく、ネクタイをしていると、バツが悪い。“空気を読めない野暮な人物”の目で見られている気さえしてくる。

で、あればだ。一体、いつからネクタイを締めればいいのか。ある若い政治家曰く、「自由」なのだそうだ。「ダイバーシティ」だそうだ。で、あればだ。小生は年中、ずーっと、ネクタイなしでも大丈夫なのだ。寒い冬場でも、ネクタイをつけずに過ごす矜持はできている。カジュアルのままでいいのだ。それが本心なのだ。でも、おそらく、そういう訳にもいかないだろう。どこかで、ネクタイを締めないといけない日が来るのではないかと不安で、不安でたまらない。主体性がない自分が嫌で嫌でたまらないのだが、「その日」に備え、いつも鞄の中に、『不要なネクタイ』を忍ばせている。

漠然とであるが、（皆が着け始めれば、着けよう）と想っているのであるが、そのタイミングが結構、微妙である。正直、皆々、そう想っているのではないか、と思いつつ、カエルかなにかのように、様子を伺っている。

で、あればだ。このまま、マスクはずっーとつけてはいるが、ネクタイは着けない変な年が過ぎて、年中カジュアルなままで一年を終えるのではないだろうか。これは、画期的なことである。堂々、人々は、なんの気兼ねもなく、他人の視線など気にせず、寒いと思えば、夏でもコートを着、暑いと思えば、冬でもＴシャツでもいいのである。「自由」とは、そういうものである。「主体性」とは、そういうものである。

しかし、だ。それでは、社会が治まらないだろう。誰かが、なんとなく、「声」を出さないといけない。いや、出してはいけない。それでは、「自由」でなくなる。それでは、「ダイバーシティ」でなくなる。そんな集団的逡巡の中で、時計が動いている。

そんな中、皇室の眞子さまが、一般人と結婚をなさった。しかも、なんとなく、衆目を騒がせるような恰好で、である。「好きだ」という純愛の感情を押し通されたのは、あっぱれではある。しかし、国民の血税で生活をされている「国民の統合の象徴」たる皇室の血縁の方である。「好きだ」「自由だ」で果たしていいのか、本心を言えば、（いいんじゃないの）と思う。けれど、（現人神の血筋とは、一体、何なのか）という微妙な想いもある。

集団的逡巡。この国には、良いか悪いかは、

わからないが、なんとなく、この秋、そんなオーラが覆っている気がしている。

余談ではあるが、贔屓の球団、春先から首位を直走っていた阪神タイガースが、この秋“予定”通り、優勝を逃した。なんでもヤクルトは、“引き分け数”が多くて、少しばかり、勝ち数では負けていても、勝率で阪神を上回ったようだ。

『優勝します！』と宣言して優勝しないチーム、阪神タイガース。ネクタイしないまま、だらだらと一年過ごすサラリーマン。一般人との純愛を貫き通す国民の象徴たる皇族の子女。本心を言えば、それはそれで、良しなのである、小生は。

愛さえあれば、それで・・・。

だけど・・・。（逡巡）

聖ルシアの日

駒田　隆

十二月は、クリスマスを中心に、これに関連した行事が行われますが、この月にはまた、「聖ルシアの日」（十二月十三日）というのがあります。ルシアは、ラテン語で「光をもたらす者」の意で、スウェーデンでは、クリスマスの祝祭の始まりの日になっています。

ルシアは、四世紀初頭に殉教した女性で、イタリアのサンタルチア（Santa Lucia）は、この聖女にあやかって名づけられました。彼女は、シチリア島生まれで、母の病の平癒を、聖アガタ（シチリアで殉教）に祈って得られたことから、神に生涯を捧げようとしますが、クリスチャンであることを婚約者に密告されて、拷問の結果殉教しました。

宗教の自由が謳歌されている今、私たちは、殉教者のことを思い起こして、イエスの愛を声高く叫ぼうではありませんか。

大いなる慰め

奈良　ノリ子

長い間コロナ禍にあって、籠りがちの日々です。先日、生命保険の社員さんより電話があり、「米寿、おめでとうございます」とのことでした。誕生日は十一月九日ですが、早いものですね。健康面ではこれと言って特別変わったこともなく教会生活も致しております。

一日一度は近くのスーパーに買い物に行き、銀行関係もスーパーで済ませております。

ある日、キャッシュカードで引き落としをしようとしましたが、カードが見当たらず、家に戻りました。家中探しましたが見つかりません。これは大変と銀行に届け手続きをすることにしました。一応、スーパーマーケットに立ち寄り、「キャッシュカードが落ちていませんでしたか」と訊いてみました。すると店長さんが、さりげなく、「これですか」と、あの懐かしいカードを差し出してくれました。店長さんもほっとしたような顔、私も飛び上がんばかりです。びっくりして喜んで帰ってきました。お届けくださったご親切な方々、善意ある方々に感謝いたしました。

神様は大いなる御手をもって、主にあるものを慰めてくださいます。

『悲しむ人々は、幸いである。

その人たちは慰められる』

（マタイ５・４）

ピーマンちゃん

長谷川和子

この二年、コロナという得体の知れないウィルスに怯え、世界中が右往左往の状況の中、医療従事者必死の働きも虚しく、召された方の、ニュースを耳にする度に家族や関係者の気持ちを思うと胸が痛む日々である。

私もこの時期知人二名と弟を天国に見送った。コロナが原因ではなかったが見舞うこともできず、会うことはもちろん言葉を交わすこともなく、多くの方が辛い思いをせざるを得なかった。

私が弟に会えたのは火葬場であった。一言「苦労の中でよく頑張ったね」と声をかけてあげたかったと残念でならない。

「人類の歴史は疫病との闘いである」の言葉に、今、私たちはその真っ只中に遭遇しているのだと感じる。

以前、何の心配もなく、旅行や外食など過ごした日々が懐かしく、また、いかに恵まれた時だったか・・・と思うのである。

コロナ禍で私は庭の花々に慰められた。

四季折々の花々はもちろん、リビングには観葉植物が沢山置いてあるので、毎朝「おはよう」と言って一つ一つの植物に声をかけるのが日課となっている。

猫の額のような庭には、ミニトマト、ナス、モロヘイヤ、つるむらさき等、何本でもないが植え成長を楽しんでいる。

特にプランターに植えたピーマンやパプリカは、たくさん実をつけ食卓にあがるようになった。このピーマン苗は私の肩位まで成長し、水分を沢山要した。朝晩たっぷりのお水をあげないと萎れたようになってしまい。水やりを催促されたように思われ「ピーマンちゃん萎れてしまったのね、ごめんね」と言いながら水分補給をすると、一時間後にはしゃきっと姿勢の良い枝になる。この様子が私には共に生きているのだと感じられ、和むのである。

もう一つ、私がコロナ禍でもなんとか元気に日々過ごせたのは次のみ言葉の力が大きい。

『神はあなたを救い出して下さる
仕掛けられた罠から、陥れる言葉から
神は羽をもってあなたを覆い、翼の下に
かばって下さる。昼に飛んでくる矢をも恐れることはない。
暗黒の中を行く疫病も、真昼に襲う病魔も、
あなたは主を避けどころとし、いと高き神を
宿るところとした。あなたには災難もふりかかることなく、天幕には疫病も触れることがない』　詩篇九一篇三～一〇

私たちが切に祈る時、神は守ってくださるのだと思う。多くの人々のために祈っていこう。

「第六波のコロナウイルスの波が再び押し寄せてくるのでは」とニュースで流されるが、これも神のみ知ることであり、どうなるかは分からない。願わくばこの暮れに今より、感染者が増えることなく、収束を願いたいと祈らずにはいられない。何も気にすることなく行動できる日を、平凡でいいから、普通の生活ができますように、主よ、助け導いてください。

切に祈ります。

天と地の間で

西山純子

そこは木洩れ日の中に、遠く街並みも見える森林歩道でした。人通りは殆どなく、彼と私は手を繋いで黙々と歩いていました。　私は、そうしているのがただ嬉しくて、時々彼の右顔を見上げて、「ああ、彼と一緒に歩いていられるのだ」と、笑顔になる自分の幸せに入り込んでいました。

彼と出会ったのは二十歳の夏でした、

いつも私の傍に居て、雲雀のようにお喋りする私に、「そうか」、「そうか」「それは楽しいね」「良かったね」と、共感してくれ、時には「そうかなあ？こうゆう見方はどうだろう？」と柔らかく、私の思い込みを正してくれることもありました。

出会ってから五年目に教会で婚約式を挙げていただき、やがて結婚しました。

私は無知と言っても過言ではないほど、世間知らずな娘でした。彼も決して世辞に長けた青年ではありませんでした。

二人は未熟なままに共に歩きました、・

結婚六十周年記念を迎える少し前に彼は天に還って行きました。寂しく悲しい中にも、地上で共に歩いた年月の、豊かで優しい思い出が今の私には力になっています。

「悲しんだり、諦めたりはしなくて良いんだよ。ボクたちはやがて天国で再会出来る。豊かな愛の想い出は山のようだ。約束された新しい出発が待っている」彼は折々私の見る彼との夢の中で申します。

『あなた方を襲った試練で人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなた方を耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

コリントの信徒への手紙一・一〇・一三』

彼の好きな聖句の一つに、私は爽やかな笑顔になります。神は愛の方です。彼と出会わせくださり、娘と息子を賜り、二人の孫をもお与えくださいました。

涙は不意に溢れます。泣きます。私は思い切り寂しさを味わいます。その後に、清々しい恵みの中に置いていただき、折りに触れて森林歩道の中で、ピクニックの草原で、コスモス畑の道すがら、一緒に入ったクラシカルな珈琲店の部厚いクッションに背をもたれながら「今日も会えたね」と頷き合います。

Ｃａｌｌｉｎｇ

本田真貴

一枚のＣＤが送られてきた。キリスト教放送ライフラインから、プレゼントとして届いたのである。奇しくも主の御名を呼び、慰めを求め祈った翌日のことであった。

音楽伝道師でフルーテイストの紫園香さんのＣＤである。聴いてみるとフルートとピアノ伴奏の、美しくも温かい澄んだ音色に、心の傷が癒され慰められた。

ＣＤの題名は「Ｃａｌｌｉｎｇ」。神様からの呼び声である。紫園香さんはフルートを吹くたび、神様からの呼び声を感じるという。ＣＤジャケットには緋色のドレス姿の紫園さんが、銀河の星々を見上げて耳をすませている。私も思い返すと、ずっと神様から呼ばれて導かれて今ここにある。苦しい時も導かれていることを忘れずにいよう。

私の魂よ。主をたたえよ。

主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。

（詩編１０３篇２節）

コロナ禍の中での喜び

佐藤晶子

昨年(二〇二〇年)は、ドイツの作曲家ベートーヴェンの生誕二五〇年という記念の年だったようで、世界中で彼の作品が紹介されていました。しかし新型コロナウィルスが猛威を奮っていたためコンサート・ホールで大勢のファンと共に演奏を鑑賞する訳にはいかず、残念でした。それでも、インターネットを駆使してどうにかファンの方々に音楽を届けて喜んで貰いたいと、音楽に携わる人達が知恵を出し合って、できる事を探しながらＳＮＳで発信しようと涙ぐましい努力をされている様子を知るにつけ、友人のために何もできない私はとても情けなく思えました。

ＴＶのクラシック音楽番組では、過去に演奏された録画に新たな解説をプラスしてコンサートの様子を届けてくれ、ＦＭラジオ放送でもベートーヴェン特集でスタッフの粋なお喋りが聴く人達を和ませる時間もたくさんあって、とても良い企画に感謝しました。番組表を目を皿のようにして、どこかに組み込まれていないかと探す日々も結構あり、自宅で自粛生活を余儀なくされている中でも少しだけ気持ちはイライラせずに送れたような気がするのです。

思えば、私がクラシック音楽に興味を抱いたキッカケがベートーヴェンの交響曲第六番『田園』だったという事もあって、彼の作品を意識的に聴いてきて五〇年を超えています。中学三年生の一年間に、音楽の先生はクラスの皆にクラシック音楽を週に一回以上聴いてその記録をノートに書いて提出するという課題を出されたので、私は両親が集めていたたくさんのＬＰレコードを借りて聴く事になりました。高校受験の準備で過敏になっていた神経が、このクラシック音楽を聴く時間のお陰で緩んで良い具合になったと、後から気づきました。

コロナウィルスの勢力がだいぶ減退して、もうすぐ元の普通の生活に戻れると期待したのに、暫くすると再び感染者のグラフが上り坂になっていくのを見る度に、とてもがっかりして以前よりも更に落ち込むようになり、夕食後に好きな編み物をいくらやっていても、心の中を冷たい風が吹き抜けていくようで、やるせない気持ちをどこに持っていけば良いのか、時を待つことが段々耐えられなくなる自分の弱さをひしひしと感じる日々が続いていました。

ある日の深夜、眠れないのでＴＶをつけたまま、ぼーっと観ていましたが、また番組表を検索していたら、ちょうどその後にＮＨＫ･ＢＳ放送の欄に、見つけたのです！それが、ベートーヴェンの唯一のオペラ『フィデリオ』の上映でした。私はまだ一回も観たことが無かったので、良い機会と思いましたが、随分遅い時刻でしたので、最後まで観る元気があるか自信がありませんでした。しかし、日本語の字幕を頼りに観ていると、いつの間にか画面に釘付けになってしまい、最後まで飽きずに観る事ができました。そして、番組が終わった時には何とも言えない感動が湧き上がり思わず拍手をしてしまった程で、その夜は久しぶりに熟睡できました。

ベートーヴェンがこのオペラを何故作ったのか、曲の内容など音楽の専門的な知識も、作曲された頃の時代背景もよく知らない者が、作品についてあれこれ言うのは何だけれども、こ

のような者が作品に感動し、明日への希望を見いだせたのならば、この作品は天からの贈り物と言えないだろうか。ベートーヴェンは、その一役をかっているような気がしてならない。

そんな思いを抱いて、今までただ漫然と聞いていた曲も多かったと思ったので、もう一度聴き直してみたくなったのです。まだ聴いていませんが、もし機会があれば早い時にオラトリオ『オリーブ山上のキリスト』という曲に興味があります。

でも、待つことのできない私には、この曲を聴く資格はないかもしれません。イエス様にそう言われているような気がするのです。

コロナに感謝？？！！　山本悦子

えっ！！コロナに感謝とは？

耳を疑いました。感謝する人などいるのでしょうか。この疫病によってどれほど多くの人が苦しんだことでしょう。亡くなられた方も多く、葬儀もできないこともありました。

この二年間、私も予定していた祝会が出来なくなり、残念でした。二〇二〇年に八〇歳の姉妹が二人、七七歳が二人、七〇歳が一人のお祝いを楽しみにしてしましたが実現しないうちに一年、一年半が過ぎてしまいました。二年の歳月は大きいです、それぞれが歳を重ね、体調を崩し、今後、集まれるか危ぶまれています。感謝どころか恨めしい気さえします。

コロナに感謝と言った友人は、本をたくさん読めました、外出しないので剰余金ができましたと言いました。なるほどそれは感謝かもしれません。友はじっと忍耐したのです。

忍耐と言えばヨブを思い出します。『主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ』。順境の時も逆境の時も主をほめたたえるヨブです。

五人の姉妹たちはどれほどこの祝会を楽しみにしていたかしれません。しかし、電話やメールで、励まし合い、思いやって、いっそう絆が深まりました。恵みの時ではなかったかと思えます。

ヨブの奥さんは言いました『どこまでも無垢でいるのですか、神を呪って死ぬ方がましでしょう』。ところがヨブはいいました『お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか』。どんな時もヨブは唇をもって罪を犯しません。

人生の試練の時、災いの時こそ本物が問われるのではないでしょうか。こんな時、ビクともしないでいられたらなんと幸いなことでしょう。ヨブの信仰に学びたいものです。

三十年

槇　尚子

私たちが寄付している団体から大きな封筒が送られてきた。何かと思って開けてみると「感謝状」なる立派な賞状が出てきた。なにこれ、私が何かしたかしらと不思議に思った。リヤイルド・ファンド・ジャパン（特定非営利活動法人）というのが送り主である。

この団体は、人種、宗教、性別、国籍を問わずに世界の子供たちに学習支援をする団体の日本事務所である。戦後の貧しい日本はこの団体にかなりお世話になったという。やがて高度成長の波に乗って豊かになった日本は、今度は支援される側から支援する側に回って活動するようになった。現在日本がかかわっているのはフィリピンとスリランカ、ネパールの子どもたちである。

私がこの団体を知ったのは、教会の青年がこの職員になったからであった。教会で私たちもスポンサーになってみんなで一人の子供を支えましょうとグループを作った。今から三十年前である。

私たちはフィリピンの子供のお父さんお母さんになった。精神的里親である。一人当たり二千円から三千円を集めて送り、クリスマスにはカード送った。里子からはクリスマスカードが送られてきたり、成長の記録が団体から送られてきたりした。小学校一年生が義務教育を卒業するまで、何人かの子供の里親になった。

フィリピンの子どもたちは年々大きくなったが、その間、私たちにも変化がたくさんあった。昔きっかけを作ってくれた青年は牧師になり、会から離れた。天国に行ったり教会を転出する方もたくさんいた。それでも細々とスポンサーを続けていた。一年間に四万八千円のスポンサー費は個人では大変だったが残った十人はみな頑張った。

そしてこのコロナ。どの教会も苦しんだ。特に経済面では小さい教会は大変だ。みんなと相談し、継続を終了することにした。年金暮らしがほとんどの教会で、献金のほかに寄付を、ということが難しい人もいた。

一人で続けようと思っていた私に声をかけてくれた人がいた。二十九年間ともに協力してくれたＭさんご夫妻とＳさんである。夫も参加を申し出、今は五人で支えている。子どもが卒業するまで頑張ることにした。ちなみにわがペンクラブのＹさんも長いことスポンサーの仲間だった。

今年は三十年目。「長きにわたる支援を通じてアジアの子どもたちの健やかな成長に大きく貢献されました。心からの感謝の意を表します」レイナ・メイ・ガラルペちゃんは元気に育っている。クリスマスは世界中どこにも等しく来る。誰もが平和な世界を願う。

一番初めに支援した子どもは、今は四十代五十代、社会を支える人になっているはずである。

マリヤのひとり旅

三浦喜代子

主イエスの母マリヤは降誕の前後に三回大きな旅をしている。その第一回目はひとり旅であった。二回目はローマ皇帝の勅令による住民登録のために、祖先の地ベツレヘムへ行った。ヨセフといっしょであったが、そのさなかにイエス様がお生まれになった。三回目は、イエスさまの命をねらうヘロデ王の刃を逃れるために、はるばるエジプトへ旅した。

最初の旅は一人だった。み使いガブリエルによる「受胎告知」のとおり、聖霊によって妊娠したばかりだった。マリヤはナザレから親類エリサベツとザカリヤ夫妻の住む山地の町へ出かけて行った。ざっと百キロを超える距離である。

現在そこはエインカレムと言ってエルサレムの西の郊外に当たる。今では「訪問教会」が建っていて、教会を囲む壁面には四二か国語で「マリヤの賛歌」が掲示されている。

私はかつてたった一度であるがその地に立ったことがある。日本語の賛歌を見た時の胸の震えを今でもありありと思い出す。

なぜマリヤは旅に出たのだろう。

聖書には「急いで行った」と記されている。マリヤの強い思い入れと決意のほどが窺われる。

婚約者のヨセフには話しただろうか。

マリヤはガブリエルに「あなたのおことばどおりこの身になりますように」と完全服従したのだから、わざわざ危険を冒して旅に出なくてもよかったのでないか、胎内の命のためにもと思う。

しかしマリヤは急き立てられるように旅立った。

すでに六カ月前に子どもを宿しているエリサベツに会うためだ。エリサベツの妊娠を知ったのはガブリエルの情報からであった。

み使いは、エリサベツも老年だが子を宿していると告げた。「神にとって不可能なことはありません」と最強のカードを手渡しながら。

マリヤはなぜそんなにもエリサベツに会いたかっただろう。いくつもの理由が考えられるし、多くの説も聞いてきたがもともと正解なんてないのだろう。聖書も語らない。聖書はいつもストレートに単純に事実と真理を明示するだけだ。その柱に添って答えを探すのが最善なのだろう。

しかし聖書の一つの場面や一つのみことばを前にして、あれこれと考えるのは無駄ではないと思う。マリヤも「思い巡らした」人であったらしい。

エリサベツの夫ザカリヤは神殿の奉仕をする祭司で、当時としてはエリートと言える。その年は特に神殿内で香を焚く重責を担っていた。その最中にみ使いから、妻のエリサベツが子を産むと告げられた。「我が老妻が…？」と疑ったことから、彼は子どもが生まれるまでものが言えなくなった。ついでながら、マリヤはみ使いの告知を「おことばどおり」信じた。この違いも興味深い。

マリヤがエリサベツを訪ねた時、エリサベツは開口一番「主の母が私のところに来られるとは！」と、大歓迎した。二人が抱擁し合う「聖画」を見たことがある。その絵ハガキが手元にある。聖書中で一番美しく感動的なシーンではないだろうか。のちに、我が子たちが神様最大のご計画を果敢に遂行する勇者になることを、どこまで知っていたかわからないが、エリサベツがマリヤを「主の母」と呼ぶところに答えがあるように思う。

エリサベツは孫ほどに年齢差のあるうら若い田舎娘に向かって「主の母」と親しく呼びかけた。どれほど謙遜で寛容な女性かと思う。

マリヤはどんなに励まされたことだろう。秘めた確信がどんなに強められただろうか。エリサベツは「体内で子が躍った」と言い、胎児とともに喜んだ。

マリヤは歓喜と感謝にあふれた。それは詩となり賛美となってほとばしった。有名な『マリヤの賛歌』はこのときのものである。

私のたましいは主をあがめ
私の霊は私の救い主である
神をたたえます。
主はこの卑しいはしためにに
目を留めてくださったからです。
（ルカ一・四六～四八）

マリヤは三か月エリサベツのそばで過ごし、ナザレへ帰っていった。

もう少しマリヤの一人旅を追いかけたい。ひとり旅・・・一人旅・・・。

聖書は一人とは明言していないから私の思いこみかもしれない。当時、女性の一人旅など思いもよらないことだったから、同行者がいたかもしれない。しかし、聖書の書きぶりから匂ってくるものは一人旅としか思えない。

マリヤがガブリエルから聞かされたことは、天地がひっくり返るほどの話だった。しかもそれは秘め事であった。口が裂けても他言できることではなかった。マリヤの小さな胸は張り裂けそうだったろう。

マリヤは単身旅立だったに違いない。しかし現実的にはあり得ないことだ。

ふと、想像の窓が開いた。

マリヤの同行者はみ使いたちだったのでないか。彼らがロバの手綱を取り、前後を警護し、空から道を教えたのだ。賛美の歌声も響いた・・・。

み使いは神さまのお心どおりに働く。み使いの群れの中に主がおられる。つまり、マリヤの旅の真の同行者は神様ご自身なのだ。マリヤのから生まれたイエス様の別名は、インマヌエル《主ともにいます》である。マリヤの旅は往路も帰路も神様と一緒だったのだ。

今、人生ひとり旅を行く私たちにも、インマヌエルの主が同行してくださっている。

まぶねのかたえに　われは立ちて
受けたるたまもの　ささげまつる
いのちの主イエスよ　わが身も心も
とりて祝したまえ

愛する主イエスよ　今ささぐる
ひとつの願いを　聞きたまえや
この身と心を　主のまぶねとなし
とわに宿りたまえ
（讃美歌２１・２５６番）

★『編集後記』

篠田一志

コロナ禍のなか『文は信なり』は４２号に続いて、降誕号として４３号を発行することが出来ました。

「ペンは剣よりも強し」ではありませんが、まさに「ペンはコロナ禍よりも強し」の感であります。

でも、本当に強かったのは背後で働いておられるお方、コロナ禍でみんなと会えない寂しさや心細くなっている私たちに寄り添って、励まし、支えてくださっている神さまだと思います。

４３号には、そのような神さまの働きを証しする者たちの声で満ちています。

ある者は収穫の恵みを感謝の言葉で、またある者はクリスマスの思い出を喜びの言葉で紡いでいます。

証しは恵みです！

どうか、この神さまからのクリスマスプレゼントを存分に味わってください。

★『後記に代えて』

三浦喜代子

クリスマスの時期になると三つの小説を思い出す。

何と言っても第一は、イギリスの文豪チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』。クリスマス大嫌いの冷血漢、守銭奴スクルージが、不思議な霊に導かれて自分の過去、現在、未来の姿を見せられ、お金儲けのために失った大切なものに気付き、改心して慈悲深い人に変わる。聖書のザアカイを一九世紀のロンドンに置き換えたような、心探られる物語である。

『フランダースの犬』も思い出す。絵描き志望の孤児ネルロと愛犬パトラッシュが、クリスマスの朝に、大聖堂の大好きなルーベンスの絵の前で笑顔を浮かべて息絶えているシーンには慟哭するばかりである。

もう一つはアンデルセンの『マッチ売りの少女』である。彼女もまたクリスマスの朝に街角で凍え死んだ。売り物のマッチをありったけすって、炎の中の大好きなおばあさんに抱かれて天に昇っていく。

私は今、主の愛に包まれて幸いな居場所を備えられているが、心の窓の外に寒さと飢えに震える「少女」がいないかと見回している。なにか、できることがあるかもしれない。

日本クリスチャン・ペンクラブ（ＪＣＰ）の自己紹介

★起源は、１９５２年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後１９６３年に満江巌氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。

★現在は２つのブロックで活動しています。★関東ブロック（関東以北の地域）★関西ブロック（大阪周辺と西の地域）です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。それぞれに作品集を出版しています。最新作は関東が**『百花繚乱　２１人の自分史』**（１８００円＋税）を、関西が**『種を蒔く５号』**（１３００円＋税）を発行しました。ご希望の方は事務局までご連絡ください。

★Web 上にホームページを開いています。（http://jcp.daa.jp/）ぜひご覧ください。

◎「あかし文章」に関心のある方は上記ＵＲＬにご連絡ください。　**本誌代一部　１００円**